Mark Twain のシンボル：蛙

那　須　頼　雅

> The little man concealed in the big man. The combination of the human and the god. Victor Hugo; Carlyle; Napoleon; Mirabeau; Jesus; Emerson & Washington (?) Grant; Mahomet; – in them..... was allied the infinitely grand & the infinitely little. Carlyle, whose life was one long stomach-ache & one ceaseless wail over it..... [1]

Twain のこの *Notebook* の言葉が示すように，人間はどんな偉人，英雄であれ，「いとも大いなるもの」(the infinitely grand) とともに，「いとも小さきもの」(the infinitely little) をあわせもつ結合体であると Twain は考えた．文明社会とは，いわば“prison”であり，そこには閉塞化，分裂化の大きな力が働き，先天的にそなわる人間の「全き本性」を損ない，変質させ，あげくは分裂させるというのである．言葉を替えると，野性の生物のみがあらゆる情況から解き放たれた全き生命であり，unity の存在であるのにひきかえ，人間は，その内的・外的情況のうちに組み込まれ，対峙的な2つの self に分裂し，それがそのままの醜い姿で硬直した双子的存在と彼はみなす．この悲惨な状態から免れ，人間の全き本性にかえるには，旅に出るか，大自然の中に身をおくかするほかないという．この立場から，Twain は旅の効能を次のように説く．

> It [Travel] rubs out a multitude of his old unworthy biases and prejudices. It aids his religion, for it enlarges his charity and his benevolence, it broadens his views of men and things; it deepens his generosity and his compassion for the failings and

> the short-comings of his fellow-creatures. Contact with men of various nations and many creeds teaches him that there are *other* people in the world besides his own little clique, and other opinions as worthy of attention and respect as his own.[2]

要するにここで Twain の言わんとする趣旨は，旅は人間を「いとも小さいもの」から「いとも大きいもの」に変える力をもつというのである．それまで，偏見，頑迷，狭量のとりこであった小さい自分が，旅をすることによって，そのとりこの立場から解放され，今まで自分で気づかなかった新しい大いなる自分を見出すことができると Twain は考える．

また，大自然の中で独り静かに瞑想するときにも，同じように「小」から「大」への健全な展開が起ると彼は自分の体験から次のようにいう．

1861年，若き Twain, Samuel Clemens は，ネバダ州の Carson City から彼の母宛てに次のように書き送った．

> I said we are situated in a flat, sandy desert. True. And. surrounded on all sides by such prodigious mountains that when you stand at a distance from Carson and gaze at them awhile,—until, by mentally measuring them, and comparing them with things of smaller size, you begin to conceive of their grandeur, and next to feel their vastness expanding your soul like a balloon, and ultimately find yourself growing, and swelling, and spreading into a colossus, and I say when this point is reached, you look disdainfully down upon the insignificant village of Carson, reposing like a cheap print away yonder at the foot of the big hills. and in that instant you are seized with a burning desire to stretch forth your hand, put the city in your pocket, and walk off with it.[3]

Twain はこの極西部の見渡す限り広々とのびひろがる平坦な砂漠に立ち，はるか彼方をぐるりととりまいて聳える雄大な山々をじっと凝視するうちに，「いとも小さいもの」にしかすぎなかった自分から，大自然の親和力によって自己の魂が「気球」(ballonn) のように大きくふくらんでいき，

遂には，その自分が膨張，拡大をつづけ，「巨大なるもの」(a colossus) に転換していくという空想を抱くのである．ところが，この「いとも小さきもの」から「いとも大いなるもの」への移行も，人間が再び自然の世界から人間の世界へと場が変わると事情は一変する．この正常な移行がにぶり，停滞し，果ては極端な分裂，硬直状態が再び訪れる．つまり，大自然の中から既成社会の中へ連れこまれるや，人間は始めのうちはあおむけになった甲虫さながらに，逆からうすべもなく足をばたつかせているが，しまいにはそのぶざまな姿態のまま硬直化してしまうという．

この Twain の特異な双子的人間観を実に巧みに象徴化し寓話的に写し出すのが，「Mark Twain 誕生」の書として知られる "The Celebrated Jumping Frog in Calaveras County"[4] である．

この Twain の処女作は，早くから論じられ，とくにその創作にまつわるエピソードとか，その民間伝承との関わりとか，その教訓的な面とか，[5] などが明らかにされてきた．しかし，それらは主として伝記的研究の領域からでない紹介的なもので，この作品の外観「いとも小さきもの」に盛られた中味の「いとも大いなるもの」に着目するものではない．つまり，従来なされたこの作品批評での重大な欠落は，この作品が，人間と動物との渾然たる隔合体であることを見落した点にある．この作品に登場するのは，かつてのカリフォーニア鉱山に住まう多弁饒舌の Simon Wheeler，やくざ賭博師 Jim Smiley，寡黙な「よそ者」の3人と，勝負強い「やくざ馬」，脚噛みの名手のブルドッグ犬，跳躍で名高い蛙という3匹の動物である．これらの人間と動物がそれぞれの和音を奏で，それによってひとつの快い曲 "The Jumping Frog" がつくりだされていることに先づ気づく必要がある．

Twain の並外れた動物好きは，彼に関する伝記書によく紹介され，よく知られている．Twain の生活は，多くの動物にとり囲まれて楽しい生活を送った Adam さながらの暮しであった．娘 Susy が伝記の中で，

Hartford, Redding での Twain の晩年の生活の一駒を次のように伝えている.

> Papa is very fond of animals, particularly of cats. We had a dear little gray kitten once that he named "Lazy" (papa always wears gray to match his hair and eyes) and he would carry him around on his shoulder, it was a mighty pretty sight! the gray cat sound asleep against papa's gray coat and hair. The names that he has given our different cats, are really remarkably funny, they are namely Stray Kit, Abner, Motley, Fraeulein, Lazy, Buffalo Bill, Soapy Sall, Cleveland, Sour Mash, and Pestilence and Famine.[6]

ここに Twain と猫との異常なまでに親密な関係[7]がよく読みとられる. とくに注意を要するのは, それぞれの猫に, 彼がそれに「いとも大いなる人間」をみとめ, その名前を与えた点である. つまり, 彼は猫を人間と同じレベルにおいてみるだけでなく, 当時の偉人, 大立物としてひろく知られた「いとも大いなるもの」の名前, "Motley", "Buffalo Bill", "Cleveland" といった名前を, とるにたらない猫につけたということだ. また旧訳の "Stray Sheep" をもじった "Stray Kit", ある漆黒の親猫には "Satan" の名をつけたと Susy が伝えている. このことは, Walter Blair が指摘したように, Twain が猫といわずすべての動物に対して "a greedy curiosity" をおぼえたことはもちろんだが, さらにもっと進んだ情感, 憧憬とさえいえるようなものを動物に感じていたことを意味している.

このことから推して, 心ない人間が動物に対して行う残忍な虐待行為に Twain の激しい怒りが爆発したであろうことは容易にうなづける. "The Chronicle of Young Satan" の Hans Oppert のエピソードは, その爆発の一例である. Hans は実に忠実で気立てのいい犬を飼っているが, ただなんの理由もなく, あるといえば快楽のために, この犬をなぐり, ける, 果てはその犬の耳が裂けてたれ下ってしまう. それを目撃した Seppi

はふるえる声で“the heartless brute”と Hans をなじる．それを聞いた Satan は，直ぐさまその言い方を訂正し，“There is that misused word—that shabby slander. Brutes do not act like that, but only men.”[8] そこで Seppi は，それを“inhuman”だと言い替えるが，それでも Satan は聞き流しにできない．“No it wasn't, Seppi, it was human—quite distinctly human.”（*MS* 75）だと Seppi の言葉使いをただす．この Hans の物語はさらにつづき，Hans はある日酒に酔い，崖から落ち，身動きひとつできない頻死の重傷を負う．犬はこの非道な Hans を二晩看とり，助けようと必死の努力をするが，それも空しく，Hans は死ぬ．犬は悲嘆にくれ，その死顔をなめ，深い愛情を示す．この物語で Twain が真に訴えたいのは，言うまでもなく，人間の動物虐待と動物の変わらぬ愛である．これが，Twain をして人間を他のすべての動物の最下位におき，“the lowest animal”だと判定するひとつの重要な根拠である．

この動物の「鞭に対するに愛」に対し，人間の「愛に対するに鞭」という真反対の性向に Twain は着目し，それを laughter や satire という「まな板」にのせて描出しつづけたのであった．

こういった観点から，“The Jumping Frog”を読み直してみると，それまで気づかなかった点が明るみにでてくる．Jim Smiley の奇僻“betting an anything that turned up”について，その愚かさをせせら笑う Twain の明るい顔と同時に，その悪質な動物虐待を憎むけわしい彼の顔があることに気づく．Smiley をまるで狂人のように熱中させる horse-race, dog-fight, cat-fight, chicken-fight は，観戦する人間には快楽を与えるものだとしても，他方，しのぎを削る動物には死の責め苦にほかならない．こういった虐待がつぎつぎにくりかえされていくうちに，動物は，いかにその本来の全き姿を損ない，内，外両面の奇形化に追いこまれていったかを，Twain は先づ写し出し，ついで，その残忍さを憎むこともしらず変わらぬ忠誠を相手もあろうに当の加害者たる人間に捧げる姿を描出し

ていく．馬とはいえ，Smiley の所有の賭け金稼ぎ用の牝馬とは，「競馬場を一周するのに15分もかかる小馬」(a fifteen-minute nag) で，走るのはのろく，喘息，腺疫，結核という持病もちである．この小さい駄馬が，いざ競馬の前後の競り合いになると，全く想像を絶する力をみせて勝ち，主人 Smiley のふところに金を貢ぐ．また Smiley が賭ける犬とは大柄の堂々たる闘犬とは似ても似つかない「小さなブルドッグの仔」(a little small bull-pup" である．しかし，このいかにも外見貧相にみえる犬も，いったん主人が金を賭けたとなると，俄然目を見はるばかりの離れ技をみせ，敵の犬の後足をくわえ，勝ちの合図がでるまで離さない．しかし，ある時運悪く咬みつこうにも後足のない犬にめぐりあい，なすところなく殺される．この２つのエピソードにつづく蛙 Dan'l Webster の話も当然同じような筋の運びである．"I don't see no p'ints about that frog that's any better'n any other frog." という「よそ者」の眼にはどうみてもそうとしか写らぬにも拘らず，実は Smiley から特別の "education" をうけ，Calaveras 郡きっての高跳びの名手なのだ．さて，こうみてくると，この小馬，小犬，蛙といずれも「いとも小さきもの」が，"Andrew Jackson"，"Dan'l Webster" という大統領，高名な政治家の名で示されるように，「いとも大いなるもの」をあわせもつ点において共通している．Smiley は蛙 Dan'l Webster のこの面を次のように語る．

> 'Flies, Dan'l, flies!' and quicker'n you could wink he'd spring straight up and snake a fly off'n the counter there, and flop down on the floor ag'in as solid as a gob of mud, and fall to scratching the side of his head with hind foot as indifferent as if he hadn't no idea he'd been doin' any more'n any frog might do. You never see a frog so modest and straight-for'ard as he was, for all he was so gifted. (*JF* 31)

それでは，ここで，Twain は一体なぜ蛙に特別の関心を寄せたのだろうかという問題に移ろう．"The Jumping Frog" において蛙以外に馬，

犬，猫，鶏，小鳥，甲虫といった生き物がでてくるのに Twain はわざわざ蛙だけをとりあげ，それを表題にまでかかげている．それだけにとどまらない．Robert M. Rodney と Minnie M. Brashear との共著になる *The Birds and Beasts of Mark Twain* によれば，この "The Jumping Frog" につづく作品，*The Innocents Abroad, Roughing It, Tramp Abroad, Following the Equator* 等の中で，蛙と明らかな近縁性をもつ生物を最も好んでとりあげたことを明らかにしている．つまり，大きくまとめて言えば，大柄のどうもうな動物よりも，小さい生き物の方を Twain は好み，また動作のにぶい匐行するものよりは，動作の機敏な，とぶたぐいのものを多く書いたという．さらにまた，単純な生活，直線的な生き方をするものよりも，複雑怪奇な，神秘性に富む生き物の方がより強く彼を惹きつけたという．たとえば，*Following the Equator* の中で Twain は鳥であり魚であり，水陸両生類であり，穴を掘り，匐行し，四足獣であるという "ornithorhyncus" という怪奇きわまる獣に強く惹かれ，刻明にその生態について書いた．

> You can call it anything you want to, and be right. It is a fish, for it lives in the river half the time; it is an amphibian, since it likes both and does not know which it prefers; it is a hibernian, for when times are dull and nothing much going on it buries itself under the mud at the bottom of a puddle and hibernates there a couple of weeks at a time; it is a kind of duck, for it has a duck-bill and four webbed paddle; it is a fish and quadruped together, for in the water it swims with the paddles and on shore it paws itself across country with them; it is a kind of seal, for it has a seal's fur; it is carnivorous, herbivorous, insectivorous, and vermifuginous, for it eats fish and grass and butterflies, and in the season digs worms out of the mud and devours them; it is clearly a bird, for it lays eggs and hatches them; it is clearly a mammal, for it nurses its young.[9]

しかし，"The Jumping Frog" 以後，蛙というはっきりとした形で登

場する作品は，*A Connecticut Yankee* である．その中で，Twain は，貴族の安眠を妨げる蛙にこのように言及する．

> ...if the baron would sleep unvexed, the freemen must sit up all night after his day's work and whip the ponds to keep the frogs quiet.....[10]

この箇所について，Rodney O. Rogers は，Twain が Dickens の *A Tale of Two Cities* のフランス貴族の栄華ぶりを示す条り，" ...in their grounds all night, quieting the frogs, in order that their noble sleep may not be disturbed...." [11] から借用しているという事実を明らかにした．ともあれ，蛙の群れを貴族の圧制下にあえぐ一般民衆にみたて，蛙の奏でる狂躁曲を，この貴族にぶっつける怒声に用いている．この「いとも大いなるもの」に抑圧される「いとも小さきもの」，蛙という概念は，The Jumping Frog" から彼の終生つきまとった固定的なものであったと考えることができよう．

蛙とは，四囲の情況からなんらの束縛も干渉もうけず，また，他に容喙もしない平和のシンボルである．食いたければ食い，跳びたければ跳び，休みたければ休む．水の中をよしとすれば水中を泳ぎまわり，水を飽けば陸にあがる．1年のうち半分は冬眠，半分は活潑にはね廻わる．こうみてくると，生きとし生けるものすべてに共通する「全き本性」をそのまま体現する生物であることに気づく．事実，蛙の象徴的意味を辞書はこう説明する．[12] 蛙は，「多産」(fertility) の女神を象徴し，男根の象徴である蛇を本来の敵とする．従って，蛙は，「創造」(creation)，「進化」(evolution)，「叡知」(wisdom) を象徴し，水と大地の生物の高度な真理探求への飛躍の姿を示すという．それにまた，蛙は，「不浄」(impurity)，「多淫」(lasciviousness)，虚言，虚栄，大言，怠惰を象徴すると書かれている．

こういった一見複雑多岐にみえる象徴的意味づけも，集約すれば，蛙のもつ天性的にたくましい「活力」(vitality)，それによって当然にして生じ

る反逆性，異端性ということになる．これら蛙にそなわる特異な性格にTwain が着目し，それへの深い憧憬から，“The Jumping Frog”以後も，主人公として，蛙さながらに「全き本性」を保つ「いとも小さきもの」を一貫してとりあげつづけたと考えられる．とりわけ，*The Mysterious Stranger* に登場する Little Satan は，この処女作の蛙 Dan'l Webster と気息を一にし，両者の近縁性，類似性は疑うべくもない．“No. 44, The Mysterious Stranger”に出てくる“Satan”は，実に卑小な別名，“No. 44, New Series 864, 962”，あるいは，それを縮小して“Forty-four”の名をもつ．それだけにとどまらない．Forty-four の衣服，言葉，欲望，関心といった，およそ人間的なもののすべてが「いとも小さきもの」という表現に一致する．次の August の眼に写る Forty-four に，この面がよく表われている．

> It was his common way, the way of a boy, most provoking: careless, unstable, never sticking to a subject, forever flitting and sampling here and there and yonder, like a bee; always, just as he was on the point of becoming interesting, he changed the subject. (*MS* 313)

この Twain の世界の“Satan”, Forty-four は，反逆と異端のシンボルであるのみでなく，「みつ蜂」の如くとびまわる「活力」のシンボルである．

しかし，ここに，この「いとも大いなるもの」に対する「いとも小さきもの」の爆発という一貫した図式に付け加えられるべき重要な一面がある．それは，“The Jumping Frog”の蛙も，“No. 44, The Mysterious Stranger”の Little Satan も，死の拷問，虐待をうけながら，その報復手段として weapon でなく，laughter を用いる面である．それは旧訳の God の下すような，飢饉，洪水，凶作，暴風といった残忍な報復ではなくて，醜い人間の分裂症状の露呈だけである．“The Jumping Frog”の

Smiley が，こうかつな「よそ者」に一杯喰わされ，40弗の賭け金をうばわれる．「よそ者」が外へたち去ってから Smiley はやっとその散弾によるからくりに気づき激怒し狂ったように後を追う姿に向けられる laughter こそ，“education”の虐待を加えた Smiley に対する蛙 Dan'l Webster の報復にほかならない．

この蛙の報復と符調して，“No. 44, The Mysterious Stranger”の Little Satan の報復が Print-shop の人間に対してなされる．「いとも小さきもの」の姿で Forty-four が Print-shop を訪れるときに経験する仕打ちは，まさに“Jail-bird”に与えられる過酷なものである．この“Jail-bird”の扱いをめぐって意見が対立し，Print-shop は２つに分裂する．Forty-four を閉め出そうとし失敗すると，あらゆる虐待行為にでる Frou Stein を頭目におく多数派，そして，Katrina を中心とする Forty-four をかばおうとする小数派に分かれ，その間で深刻な争いが起る．この分裂は，グループ分裂の段階から，さらに一歩進み，個人内の２つの self の出現という内的分裂をひきおこす．これは，言うまでもなく，Forty-four が，それまでうけた数々の虐待に対する報復行為である．こうして，植字工たちのそれぞれが，“Waking-Self”と“Dream-Self”の２つの分裂症状になやむ双子的存在に転換させられる．

以上で明らな如く，“The Jumping Frog”の蛙も，“No. 44, The Mysterious Stranger”の Little Satan も，人間からうけた虐待に対して，weapon による殺しではなく，laughter による匡正という報復を行うという点で全く一致する．

この「目には目，歯には歯」という旧訳の直接的報復を避け，人間の分裂し硬直し奇形化した醜い姿態を laughter というまな板にのせる報復を作品にうちだす Twain の真のねらいは，God に対する，とりわけ，旧訳の God に対する Twain の精一杯の反逆である．Twain は，普通敬けんなクリスチャンが自らを“A Son of God”という呼び方を皮肉って，

"A Son of Adam" だと呼んだ．作品としても，"Eve's Diary" と共に "Adam's Diary" という奇抜な日記を書いた．この Twain の Adam 崇拝を支える信条は，Adam が人間の汚れない「全き本性」のシンボルであり，従って，"disloyalty to God" の体現者であるというものである．Twain の "Irreverence is the champion of liberty and its only sure defense"[13] という固い信念にかない，Paradise と Hell の両方を経験済みの Adam こそ，「いとも小さきもの」と「いとも大いなるもの」との間にあって，その両極に偏しない理想的な unity の存在であったにちがいない．

God の前にひれふす Adam の子たち，人間，は，すべて Twain の眼には痛ましいまでに「いとも小さきもの」として写った．

> Kings and all. . . . All men are so very very little, so microscopically little, not alone to the eye of God but when they searchin〔g〕ly & honestly examine them-〔selves〕 it seems foolish to go thro the pretence of detecting differences & distinctions.
> (*MS*, 460–1)

これほどまでに人間が「いとも小さきもの」であれば，たとえ罪悪の道に落ちこもうとも，どんな誤ちを犯そうとも，責められるべきではないとさえ Twain は言う．

> Pity—don't scoff at & despise & hate the race. It is 〈sw〉 victim of a *swindle*, & the arbitrary character of its nature makes it blameless. It has no responsibility. (*MS*, 461)

この自らの背の後ろに人間をかばいつつ，God と正面きって相対する Twain の irreverence は，「いとも小さきもの」が「いとも大いなるもの」の圧力に耐えかねての爆発であり，"The Jumping Frog" から "No. 44, The Mysterious Stranger" にいたるまで変わらず Twain の心の「暗室」に潜在したものが吹きだした真情にほかならない．この爆発

の激しさは，Forty-four の口を通して噴出する次の God 批判の語気に容易に感じとることができる．

> . . . a God who could make good children as easily as bad, yet preferred to make bad ones; who could have made every one of them happy, yet never made a single happy one, who made them prize their bitter life, yet stingily cut it short; who gave his angels eternal happiness unearned, yet required his other children to earn it; who gave his angels painless lives, yet cursed his other children with biting miseries and maladies of mind and body; who mouths justice, and invented hell—mouths mercy, and invented hell—mouths Golden Rules, and forgiveness multiplied by seventy times seven, and invented hell; who mouths morals to other people, and has none himself; who frowns upon crimes, yet commits them all; who created man without invitation, then tries to shuffle the responsibility for man's act upon man, instead of honorably placing it where it belongs, upon himself; and finally, with altogether divine obtuseness, invites this poor abused slave to worship him! . . .
>
> (*MS*, 404–3)

ここまでくるとだれしも，彼の講演旅行の前ぶれに用いた蛙にうちまたがる Twain を描くポスター画は，単なる戯画ではなくて，「いとも小さきもの」としての人間に徹し，その人間の姿を描きつづけた Twain の真髄をうがつものであることに気づく．Twain と重なり合い，融け合い，それと合一体をなしているという意味合いにおいて，蛙は文字通り Twain のシンボルなのだ．

(April 16, 1975)

注

1 *Notebook* # 23, 37 (Mark Twain Papers).

2 A. B. Paine, (ed.), *Mark Twain's Speeches* (New York, 1923), pp. 29–30.

3 Quoted in E. Wagenknecht, *Mark Twain: The Man and His Work* (Univ. of Oklahoma Press, 1962), p. 20.

4 Mark Twain, *Sketches New And Old* (New York, Harper & Brothers,

1906) に拠る．以後は，略記して "The Jumping Frog" とし，それからの引用は (*JF* 頁数) で示す．

5 このような見方は *Notebook* # 28 (Mark Twain Papers) に Twain 自身のものとしてみられる．

Well sir, that learned me a lesson; & I've always said to the boys ever since, Don't you put too much confidence in a stranger. Says I, this world is full of uncertainties & don't you bet on no frog till you know whether that frog is *loaded* or not.

6 Quoted in R. M. Rodney & M. M. Brashear, *The Birds and Beasts of Mark Twain* (Univ. of Oklahoma Press, 1966), p. 6.

7 猫を Twain は *Notebook* # 26A (Mark Twain Papers) の中で次のように賞揚する．

The cat possesses these characteristics. She never cringes, to either friend or enemy; she is (no one's slave to no one, & not even servant;) she is independent; she (has) (is the only creature who) never forgets his dignitfy & never degrades it; she resents injuries whether offered by friend or enemy, & some (thou) wise people have called this "treacheries"....

8 W. M. Gibson, (ed.), *The Mysterious Stranger* (Univ. of California, 1970), p. 75. 以後このテキストからの引用は (*MS* 頁数) で示す．

9 Mark Twain, *Following the Equator* (New York, Harper & Brothers, 1906), p. 72.

10 Hamlin Hill, (ed.), *A Connecticut Yankee in* King Arthur's Court (Scranton, Chandler, 1963), p. 156.

11 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities*, The New Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford Univ. Press, 1962) Book III, Chapter x, p. 309.

12 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (London, North-Holland Co., 1974), pp. 204–5.

13 *Notebook* 195 (Mark Twain Papers).